

## 東南アジア研究への接近

稲 葉 昌 幸

### 文化圏を考える

東南アジアの国々、それぞれの民族、種族、それらの歴史的、文化的な差異については、——このことは東南アジアに限ったことではないが——例えば、ヨーロッパ人、アメリカ人、ラテン・アメリカ人、中近東人、東洋人、など漠然と地理的な基準で一律に同じ取り扱いをすると、考えもしなかった誤解をまねいたり、警戒心をひきおこしたり、笑いものになったりすることがある。ましてや、東南アジアのように長い間、植民地支配の苦汁をいやというほど舐め、しかも「類人猿からお釈迦様まで」というほど多くの種類の人々が生活し、個々の文化に差異のはなはだしきところでは、細心の配慮がのぞましい。

むつかしくいえば「直観的類型化をやめて、より科学的研究への志向」がぜひ必要である。

「文明の生態史観」の著者梅棹忠夫氏は同書で東南アジア各国のもつ文化的特徴を例えば、民族、言語、文字、宗

教、歴史等々、を検討しながら「東南アジアの生活様式、あるいは、東南アジアの文化というようなものは存在しないのだ」とのべ、さらにつづけて、「これは今日の世界においても、一つの異常なる地域といわなければならぬと思う。たくさんの小さい国が、ある地域にゴチャゴチャとあつまっているという点では、西ヨーロッパもたしかに同じである。しかし、西ヨーロッパの国々は、東南アジアほど異質的な国々のあつまりではない。民族的にいつでも、せいぜいラテンかゲルマンかである。宗教はキリスト教、カトリックか新教かのちがいだだけだ。全体として、あきらかに一つのまとまった文明圏である。東南アジアは、一つのまとまった文明圏とは、ちょっといいにくい」と結んでいるのも、東南アジアの文化をパターン化して定型的に固定化することの困難さをのべたものと思う。

東南アジアの文化圏の設定が、どれほど困難で、注意深さが要求されたにもかかわらず、東南アジアには、いくつかの文化圏設定の線引き作業が多くの学者によって検討され、実施された。

(イ) 中国文化圏、(ロ) ヒンズー文化圏、(ハ) イスラム(回教)文化圏、(ニ) キリスト教文化圏がこれである。

これらの文化圏の類別は、民族、人種、言語の類似性、共通性、または同系列とは必ずしも一致しない。

例えば、インドシナ半島の諸民族、諸種族の多くは、中国大陸から南下したが、中国内陸部には今なお同類同種の種族がおりながら、文化の面ではいろいろに分化し、必ずしも同一文化圏内に線引きされない。

中国文化圏、ヒンズー文化圏、イスラム文化圏、キリスト教文化圏をもう少し地域的に説明を加えると、

(一) インドシナ半島のアンナン山脈を境に、S字型の山なみの東側ベトナム人が主として住んでいる地域は中国文化圏に入る。(東南アジア全地域に散在する華僑(華人)社会は、この文化圏とは別に異なった完全な華僑(華人)文化を保持している。)

(二) アンナン山系のS字型の西側、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマは小乗仏教が支配的で、インド、セイロンを含めて、ヒンズー文化が支配的な文化圏をつくっている。

(三) マレーシア、インドネシアは、ヒンズー文化の基底の上に回教文化が支配する地域といえよう。

(四) フィリピンは、群島に散在する各種部族が統一文化を持つまえに、つまり、各種部族がそれぞれ、固有な、素朴な文化を持ちながら、スペインの植民地支配に組み入れられ（一五七一年）、キリスト教化が強行された。（ただし、南部ミンダナオ島、スールー諸島などの島には、モロ族のような頑強に抵抗をつづけ、今日にいたるも抵抗しつづけている回教徒もいる。）

したがって、他の東南アジア諸地域にくらべれば、キリスト教的＝スペイン風文化の基底は色濃く存在している。このスペインの三三〇年の植民地統治後、米西戦争の勝利により、アメリカがフィリピンを領有し（一八九八年、ここにスペイン風文化にアメリカ文化的变化を加えた）。

以上は、大別した東南アジアの文化圏の区分である。一応こういう文化圏を考える場合、支配的種族や少数民族、または、種族が伝統的にもついていた固有の文化が消滅したことを意味するものではなく、二つまたは、三つの文化圏の混在している場合もあり、欧米文化の移入により変容のいちじるしいものもある。

また、ここで、もう一つ全然別の文化圏のとらえ方として「稲作文化圏」を考えてみよう。

東南アジアは稲作を中心とした民族の起源地であるといわれる。そして、「稲作文化」とよばれるものが、政治、経済はいうにおよばず、この地域の日常の生活形態や儀礼にいたるまでしみこみ、長い生活慣習、伝統の中ではぐくまれ、育ってきた。したがって、この地域におこるいろいろの文化現象、社会現象を理解するには、その基底をなす

稲作民族の生活様式、行動様式を知らなければならぬ。

その意味で、例えば、この地域における住民の文化要素 (Cultural factor) を分析し、各地域におけるいろいろの特性を比較研究し、その文化領域 (Cultural area) と年代領域 (Age area) とを構成してみて、稲作文化の重層性を明らかにする試みなどはその一例といえる。

この地域には、前にものべたように、いろいろの種族、部族が永い世代にわたって、移動し、定着し、いろいろな生活形態を保ちながら居住している。

したがって、種族、部族間の血も、歴史も、伝統も、複雑に混合し、溶け合っている。文化の重層性の解明というテーマもそう簡単ではない。

東南アジアの稲作地域という範囲は、東南アジアのほぼ全域にわたると考えられる。

その文化の潮流は、種族、部族の移動と影響し合い、関連を持ちながら大陸山間部から平野部へ、そして、さらに東南の諸島へと押し出されるような姿で移動したと考えられる。とすれば、この研究上の地域上の視点も、とうぜんまず、大陸部の文化に注目しなければならなくなってくる。

そして、大陸部の農民を調べてみると、彼らは河口デルタと海岸地域に集まり、水稻耕作を営むのが常である。諸島、群島といわれている地域の農民は、中部ジャワ、西北部ジャワ、中部ルソン島など、おおむね、右にのべた大陸部のミニ版的パターンが多い。

したがって、稲作文化を農民人口と稲の収穫量といった側面からとりあげれば、どうしても、右のような地域に視点を置かざるをえなくなってくる。

ところが、別の分野、例えば、生活形態の側面から、この地域の文化の複合性、重層性を調べようとすれば、右にのべた人口密度の高い、農耕の比較的さかんに営まれている地域だけ検討するのでは不十分である。

なぜなら、学問的に未だ不明な分野が多いとされている焼畑（移動）耕作民の生活形態が疎外されているからである。

彼らの伐採し、焼く面積も正確には判然としないが、ある調査では一、六〇〇—二、〇〇〇万ヘクタールであり、ほぼ水稲面積に近いとされている。しかも生活内容の伝統的な部分は彼ら焼畑耕作民の何んらかの所産であったことを想起すれば、彼ら焼畑耕作民の生活形態の変化、変容を素通りするわけにはいかないことになる。

とにかく、「稲作文化」というと「水稲」が前に押し出され、スポットを浴びがちだが「文化圏」ということであれば、「焼畑」も大きな比重を持っているわけだ。

アジア経済研究所の市川健二郎氏は、『東南アジア稲作地域における生活形態』でこのことについて、「東南アジアの稲作文化は、きわめて複雑な文化層によって構成されており、長い歴史の伝統のなかにおいて変型しつつ現在におよんでいる。したがって、水稲耕作民の生活形態の特色を総括的に表現することは不可能なことといえよう。それにもかかわらず、やはり、焼畑移動民の生活と水稲耕作定着民の生活との間には明白な相異が示されることも事実である。同じ水稲耕作民のなかでも『くわ耕民』と『すき耕民』との間にはかなりの相異がある。前者はむしろ焼畑民の生活に近く、後者になるにつれて平野部の広い地域に腰を落ちつけて農民生活を営むことができる。階段畑あるいは階段水田の農耕民を除けば、かれらはもはや山間部の傾斜地に住む必要はない。焼畑伐採生活の大家族による男子の労働グループは解消して、新しく夫婦単位の農村生活を送ることができる。たとえば、ラオス山間の焼畑民と水稲民

との生活に関する調査記録によると、焼畑の耕作労働は、主として男子がこれをおこない、その家族内でも父と男子とが一つの単位となっている。ところが付近の水田を主とする村は夫婦が一つの労働単位となっているばあいが多い。また、別の調査では水田耕作を主とする村では、各家族が完全に独立して、家族単位の所有地をもち、水田耕作の活動に便利な家族単位の労働を営んでいる。これとは反対に焼畑のばあいには、全グループの労働力の動員を必要とし、男子グループ、女子グループの分業が明らかである。—中略—断片的資料からただちに東南アジア全域の家族構成について意見をのべることはできないが、少くとも焼畑耕作民と水稲耕作民との労働単位の相異は生活に大きな変化をもたらすであろうことを推測しうるのである」と説明しているが、市川健二郎氏の指摘しているとおり、「稲作文化圏」の文化特性は複雑な様相を示している。

まして、この問題を「文化要素」の面から検討を加えようとすれば、なおさら、今後に残されている問題は多いといわなければならない。

例えば、階段状水田で有名なインドネシアのジャワ島、バリ島、スマトラ島のバタク族 (Batak)、メナンカバウ族 (Menangkabau) を文化要素の分野から解明した、元シカゴ大学の F・コール (F. C. Cole) 氏のレポートを引用してみると「苗床と移植、穀倉の作り方、田の中の<sup>た</sup>霊屋と供儀、鳴子と柏子木、三日月形刃穂づみ刀、女子の初穂刈り、初穂儀式 (Batak では行われず)、稲霊と穀母などの諸文化要素は、必ずしも、マレーシア、インドネシア稲作文化圏全域にひろまっていない。むしろ、フィリピンで焼畑と階段水稲作りとタロイモ作りが、並存して営まれているティンギアン族 (Tingian) に右の文化要素がすべて備わっている。

これに反して、階段水稲作で有名なイゴロット族 (Igorot)、イフガオ族 (Ifugao) の間では、穀倉の作り方、田の

中の霊屋と供儀、三日月刃の穂づみ刀、女子の初穂刈り、稲霊と穀母などの文化要素が欠如している。そして、これらの種族の文化特性はむしろアッサム地方のナガ族 (Nagas) の階段水稲耕作文化に類似しているといわれている。したがって、アッサム地方から華南を経てフィリピン北部におよぶ階段水田稲作文化と、インドネシアからフィリピンのティンギアン族におよぶ女子の初穂刈りをとともなう文化とは、同じ階段水稲耕作文化ではあるが、系統というか、流れが異質のものと考えられる。

### 文化研究の歩みと方法

東南アジア文化の科学的な研究は一九世紀の末から二〇世紀にかけてようやく軌道にのってきた。リバーズ (W. H. Rivers) は一九一四年「弓を使う文化」Ⅱ「弓文化」の研究から伝播論を展開し、マンチェスター学派のスマイス (G. E. Smith) は一九二八年の論文を中心とした諸論文で、東南アジアの巨石文化はエジプトの巨石文化がその起源であるという説を主張した。

その前に、一九世紀後半ダーウィン (C. H. Darwin)、モルガン (L. H. Morgan) の進化論、人類学者タイラー (E. B. Tylor) によって展開された進化主義も本題名と無関係ではない。

また、東南アジアの文化研究に大きな影響を与えたものの一つに前項でのべた「文化圏説」がある。文化圏説は、文化の伝播を重視し、世界的規模で文化の研究に取組まれたものである。

地理学者のラッツェル (F. Ratzel) は、この学派の先駆者として有名であるが、文化圏説を真に世に問うた人は、

一九〇五年ケルンの民族博物館にいたグレブナー (F. Graebner) とアンカーマン (B. Ankermann) を挙げることもできる。

彼らは、オセアニアとアフリカの文化圏、文化層の分析を試み、これを世に問うた。ケルン学派といわれる。

グレブナーは物質文化を中心とする博物館民族学の上に立つ学者で、正確な資料から具体的事実を基礎として、一つ一つの素材を客観的な態度で積み重ねて文化圏文化層を研究した。彼は、文化の空間的分布つまり文化圏と、時間的前後関係つまり文化層とを明らかにすることによって、「記録のない歴史」の再編成を試みた。グレブナー、アンカーマンの首導するケルン学派の文化圏説について少し説明を加えておこう。グレブナーは進化主義に反対し、文化の独立発展という考え方に消極的であった。

つまり、彼によればちがった民族、種族の間に類似した文化が、何時でも、何処でも起こりうるということは考えられない。むしろ、それは、例外的現象であると考えた。

彼の関心は、諸民族の歴史的接触または部族から部族へ移って行くと考えた。つまり文化の伝播であるが、彼の場合、研究者が単なる外見の類似の特性を時間、空間関係において比較研究する場合、陥り易い「主観的判断」「独自の解釈」に非常な注意を払った。

そして、そういうリスクを避けるため、彼は資料の吟味に非常な力を入れ、類似要素の研究において二つの基準を明らかにした。

第一の基準は「形式基準」という。これは二つの類似する文化要素を比較する場合、比較されるものの本性自体から必然的に起こる類似でない場合に形式基準があてはまる。



例えば、西アフリカの弓とメラネシアの弓とを比較すると、両者ともに、弓の断面が似た形をしているだけでなく、弦を弓につけるのに編んでつくった環の「弦受け」をつけている。弓の断面は円でも、楕円でも、長方形でもよい。弦は弓の両端に弓管をつくってもよい。前記二つの弓が断面や環の「弦受け」において持つ特徴は、弓自体の本性から当然起こった類似ではない。したがって、西アフリカの弓とメラネシアの弓との類似は、弓の本質的目的や材料の性質からきたものではないから、独立発生とみるよりも、両民族の間に文化的接触、歴史的関係があったと考えらるべきであるという。

第二の基準は「量的基準」という。類似の要素が一つだけでなく、数多くあるとき、この基準が成り立つ、先にのべた「形式基準」だけでも文化の歴史的関係を明らかにする力があるが、「量的基準」がこれに加わることによって、一層強力となる。例えば、西アフリカとメラネシアの文化関係は弓に関する「形式基準」だけでも判明したわけだが、二つの種族、部族の間には、その他にも形式的、量的に楯の形、家の形、仮面、樹皮布の衣料、太鼓の形、など数多くの類似があるから「量的基準」によっても関係が認められる。グレブナーは以上二つの基準は論理的妥当性を持つから、比較研究されるものの間に地理的または年代的なへだたりがどれほどあろうと、文化関係は成立すると強調した。距離が遠く離れていることや、年代が違うということだけで伝播を思いとどまる者は、「時間と空間に対する恐怖」を暴露する臆病者だとさえた。

彼、グレブナーのこの学問的態度は、「文化類似の有無」を中心として外形的に研究を行うことに重点を置いた。したがって、内面的な価値、動機、選択、理想、価値観などは、どちらかという、主観的、心理学的な解釈に陥る恐れがあるとして、極力これを避けた。

彼は What, Where, When に焦点を合わせ、Why の問題の解明をおろそかにした。しかしこのことは、グレンブナ  
ーが文化の歴史的な推移の研究に心理学的な解釈の必要性を認めなかったということではなく、むしろ、その実行に  
はなほだしく用心深すぎたといえよう。

一方、文化領域 (Cultural Area) 年代領域 (Age Area) の考え方を打出した、アメリカのフランツ・ポアズ (F.  
Poas) を中心とする、アメリカ的歴史主義、ならびに現地調査資料重視主義の流れを汲んだ人類学者の活躍も重要で  
ある。

この一連の人類学者は、先にのべたケルン学派の文化圏説のような世界的規模において記録のない未開社会の文  
化を解明しようとするのではなく、主として身近な北アメリカ現住民、つまりアメリカ・インディアンと直接接触する  
ことによって得た文化の分布、伝播、同化から具体的な歴史を研究するインテンシブな地域集中方法を駆使した。こ  
の傾向はクラーク・ウイスラー (C. Wissler) 、『A・L・クローバー (A. L. Kroeber) に受けつがれ、マダガスカル島  
の研究 (一九二八年) のラルフ・リントン (R. Linton) 、『ルース・ベネディクト (R. Benedict) のニューギニア東端  
のドブ族 (Dobu) のヤムイモ栽培住民の文化型研究、同じく、女性のマーガレット・ミード (M. Mead) のスマトラ、  
バリ、ニューギニア、サモア、アドミラル諸島の調査における「文化と個人の行動型、文化とパーソナリティの関  
係」の研究等々は、東南アジアの文化の研究に大きな影響を与えるものといえよう。

以上の文化圏、文化再編成の研究方向とは別に、東南アジアの文化の研究に欠くことのできない別の方向づけを持  
った学者達の一団がいた。その代表的なものは、イギリスのラドクリフ・ブラウン (A. R. Radcliffe-Brown) のイン  
ガル湾のアンダマン島民の生活調査 (一九〇六—一九〇八年)、オーストラリア原住民の社会組織の調査研究 (一九一〇—

一九二二年)と、ロンドン大学のプラニスロウ・マリノフスキー(B. K. Malinowski)のニューギニア東方のトロブリ  
アンド諸島の原住民の調査(一九一四—一九一八年)がこれである。

そこでは、生きた現実の文化の機能的、動的な相関関係を分析し解き明かそうとする、いわゆる機能主義の研究の  
いとぐちをつくった。

A・F・ブラウンは、アンダマン島民の調査で涕泣儀礼を取り上げ、彼らの儀礼は、単なる儀礼ではなく、一つの  
慣習として、その社会の構成員に強制されるものであり、儀礼そのものが社会的な紐帯をより強め、共同社会のため  
の統一と統合の共同感情を強化し、社会の維持存続に欠くことのできない役割を果たしていることを実証している。

またB・マリノフスキーは、トロリアンド島民の呪術(magic)の調査で、呪術は社会的、心理的な欲求充足と  
いう機能を中心にした特定の目的達成のための手段として役割を果たし、あくまで日常生活の実際的な価値ある行為  
として成り立っていることを証明してみせた。

これらの機能主義的な研究方法は、後にマーガレット・ミードや、ルース・ベネダイクトの業績と合流し、地域社  
会の特に未開な文化をきめ細かく、構造的、心理的に解明する方向づけに大きな役割を果たすことになると同時に、  
現在ではむしろ文化の「接触と変容」のプロセスを取り上げる傾向が多くなってきた。

また、東南アジアは、一、二の国をのぞいて長い間ヨーロッパの植民地としてその支配下にあった地域が多いだけ  
に、旧宗主国ならびに、それに関連ある機関または、心ある学者が、それぞれの分野で年季の入った調査をつづけ  
ていた。

たとえば、インドシナ四国の研究はフランスの極東学院(Ecole Française d'Extrême-Orient)を中心に主に第二次

大戦前まで大いに活躍し、フランス系の人文科学誌フランス・アジエは歴史、民族関係の内容を誇っていたし、旧南ベトナム国立博物館インドシナ研究会 (Société des Etudes Indochinoises) は人文科学研究の中心であった。

タイ、では王立研究所 (The Royal Institute)、『シヤム学会 (The Siam Society)』、チュラロンコン大学人文学部 (Faculty of Arts and Education, Chulalongkorn University)、『インドネシア学会』、もともとオランダ王立研究所を中心とするオランダ人類学者の活躍がめざましかった。例えば、一九五八年オランダに帰国したファン・ヘケレン (H. R. Van Heekeren) の戦後までつづいた野外調査の実績、『ケーニヒスワルド (G. H. R. Von Koenigswald) の活躍も忘れてはならない。

第二次大戦後、フランス、オランダの東南アジア研究者が帰国し、それにかわってアメリカ人学者、アメリカの研究機関の進出が目立ってきた。コーネル大学のタイ研究機関の L・シャープ (L. Sharp)、『G・W・スキナー (G. W. Skinner)』、『T・M・フレージャー (T. M. Fraser)』、『ハーバード大学のヤング (J. E. Young)』、前にのべたルース・ベネディクトもタイ人の行動型について研究したし、またホール (D. G. E. Hall) のタイ史の研究、エール大学の J・F・エンブリー (J. F. Embree) の民族誌研究、そして、在タイ四十年、タイ研究のザイデンファーデン (M. E. Seiden-faden) などがあつた。

フィリピンは歴史的にアメリカ人の研究が活発に行われた。カリフォルニア大学のギフォード (E. W. Gifford)、『ハワイ大学のソルハイム (W. G. Solheim)』、『シカゴ大学のクローブ (A. L. Kroeber)』、『ロンドンビア大学のカンクリン (H. C. Conklin)』の稲作民調査、『エール大学のハート (D. V. Hart)』の居住形態調査研究などが挙げられる。

インドネシアでもエール大学東南アジア研究部門には長い間インドネシアの研究に携わった人達がいる。ケネディ

(R. Kennedy)、エンブリー (J. F. Embree) 等の農村生活と近代化の調査などもその一つである。

インドシナ半島においても、コロンビア大学のラオス村落調査、カンボジアの総合調査研究がある。

日本も遅ればせながら、日本民族学協会の第一次東南アジア稲作文化調査団（一九五七年）、第二次東南アジア稲作調査団（一九五九年）の東ジャワ、バリ島の現地調査、京大人文科学研究所の東南研究調査、その他、古野清人、馬淵東一、瀬川孝吉、金関丈夫、宮本延人、山本達郎、松本信広、牧野巽、大林太良、綾部恒雄、等の諸氏のこの地域での個人的な研究業績や資料は貴重である。

東南アジアの科学的研究は、未だ一世紀にみたない短い歴史しか持たないうえ、第二次大戦の終結をさかいとして、学者の交替現象などがあり、現地研究が特定の国を除いてはまだようやく発足しかけた段階であり、一番地理的に身近な日本人学者による現地調査は前にのべたように、ごく限られた個人的な調査研究の域を出ない状態にあるといえよう。

いずれにしても、その研究方法は、まず現地の調査および資料作成、その整理分析からはじまる。各文化要素の分布つまり「文化領域」を考え、生活形態を形成している。各文化複合の領域を考える。

次に、歴史、伝統の中で、つまり時間的にそれらが「文化重層」関係を持って組み合わさっているかを考える。

次に、それらの文化が新しい異文化と接触した場合の変化の過程を追求し、あわせて変化過程の背景をも解明する。ただし、文化を研究するといっても研究者の「ものの考え方」「ものの見方」によって、研究の方法にもちがいがでてくる。例えば、前にのべたように、進化主義 (evolutionism) の立場にたって、東南アジア諸民族文化の跋行性に注目する考え方、伝播主義 (diffusionism) の立場からアフリカ、中東、インド、中国、東南アジア諸国などの文化の伝

播を見つめるいき方、先に説明したような、文化圏説、文化層説の立場から類似文化の歴史的関係を検討し、空間的に並列する諸文化圏を歴史的な前後関係を持つ文化層として捉えようとする方法、また、機能主義 (functionalism) の立場から現地の調査資料を分析して、その社会構造と社会機能とを把握する見方。同じ機能主義の立場に立ちながらどちらかという文化の担い手である構成員の欲求とか希望とか心理的な側面に焦点をあてて検討する方法。ルス・ベネディクト女史のように、行動の様式、「文化の型」を見出すべく文化の内面に解明のメスを加えようとする考え方。また、文化変化あるいは文化変容 (acculturation) のプロセスをテーマとして、その社会の構造、機能の分析を通して文化複合全体の変化を追求する考え方などが挙げられる。

また現在社会生活の構造、機能の分析の方法と過去の文化史の再編成を結びつけようとする方法も試みられている。つまり、東南アジアにおける現在の文化の接触変化を稲作文化の長い歴史と伝純の中において繰り返して接触変化の歴史を背景として捉えようとする方法などはこれである。食料獲得のための生産技術——サゴヤシ採取形態、焼畑イモ類栽培形態、穀類栽培、水稻耕作、犁耕灌漑農耕、換金農業などの諸形態の変化は居住形態を左右し、居住形態の変化は社会構造に影響を与える——といった一連の文化変化の連鎖つまり「文化連鎖」の研究なども比較的新しい研究カテゴリーに入れてよからう。